

エドワード1世によるスコットランド統治計画

A scheme of government for Scotland by Edward I

川 瀬 進

分野：経済史：イングランド経済史 332.33

キーワード：封建制度、アープロース宣言、グレート＝スキタイ、DNA、男系のY染色体（Y-chromosome）、アイアン＝リング、'auld alliance：古い同盟'、ダンバーの闘争、スクーンの石

I はじめに

ヘンリー3世（Henry III, 1207.10.1-1272.11.16：在位1216.10.28-1272.11.16）の王太子エドワード（Edward）が、1274年8月19日、ウェストミンスター＝アベイ（Westminster Abbey）で、戴冠式を挙げ、法的にイングランド国王エドワード1世（Edward I：長脛王Longshanks：スコットランド鉄鎚王Hammer of the Scots, 1239.6.17-1307.7.7：在位1272-1307）になった。

エドワード1世が、1272年8月19日、イングランド王に就いた時は、王国内の治安が安定しており、何も問題がなかった。

このことは、フランスのイングランド領ガスコーニュ（Gascony）総督として指揮を執っていた王太子エドワードが、父ヘンリー3世の死後、急遽イングランドに帰り戴冠式を挙げなくても良かったことから、判明できるであろう¹⁾。

なお、このガスコーニュは、フランスと絶えず小競り合いが続き、イングランドとしては、経済上、および史的にも死守しなければ領土であった。

だが、エドワード1世は、王室財政を逼迫させ、かつ成果の上がないフ

1) 父ヘンリー3世の崩御が1272年11月16日、葬儀が1272年11月20日であった。この葬儀のときに、司教、有力パロンによって、王位継承者として、王太子であったエドワードが推戴された。その後、エドワード1世として、戴冠（1274年8月19日）するまで、1年半以上もあった。このことから、当時のイングランドは、平穏であったことが窺える。

ランスでの領土拡大を、止めなければならなかった。

イングランド国王になったエドワード1世の責務は、イングランド王国内の治安の安定と、経済的水準を上昇させるための領土拡大であった。

すなわちエドワード1世の責務、野望は、“グレート=ブリテン (Great Britain)” の創始者になることであった²⁾。

具体的には、隣国西部のウェイルズ (Wales: カムリ Cymry)³⁾ と、北部のスコットランド (Scotland) への、侵攻、征服、併合である。

だが、同じ政策を、両王国に施行することはできなかった。

というのは、両王国の国力、および地誌が異なっていたからである。

当然といえば、当然のことであるが、このことを、エドワード1世は、熟知しながら政策を行おうとしていた。

特に、スコットランド王国については、困難を極めた。

ローマ帝国皇帝クラウディウス (Tiberius Claudius Drusus Nero Germanicus, 10 BC-AD 54: 在位41-54) は、領土拡大のため、ローマ軍に、紀元43年、グレート=ブリテン侵攻を命じた。

そして、ローマ軍 (the Roman legions) は、グレート=ブリテンの南部から侵攻し、約3分の2を征服し、その地を、ローマ帝国属領ブリタニア州 (ラテン語: Britannia: 現イングランド) にした。

その後、ローマ帝国皇帝ウェスパシアヌス (Titus Flavius Vespasianus, 9.11.17-79.6.23: 在位69-79) は、紀元79年春に、更なる領土拡大のため、征服の手が及ばなかったブリタニア北部への侵攻を、ブリタニア総督グナエウス=ユリウス=アグリコラ (Gnaeus Julius Agricola, c. 40.7.13-93.8.23) に命じた⁴⁾。

2) Cyril E. Robinson, *England: A History of British Progress from the Early Ages to the Present Day*, Thomas Y. Cromwell Company, 1928, p. 108.

3) 410年、ローマ軍が、グレートブリテン島から撤退したのち、アングロ=サクソン人 (the Anglo-Saxons) が遣って来て、彼らが、原住民のケルト系ブリトン人 (Briton) たちを、ウェイルズ半島に追いやった。その時、ウェイルズ半島に逃げ延びた原住民のケルト系ブリトン人たちは、自分たち自身のことを、カムリ (Cymry) と呼んでいた。
・Gerald Morgan, *A Brief History of Wales*, Reprinted of 2008, edition, Y Lolfa, 2011, p. 21.

この命令直後に、ローマ帝国皇帝ウェスパシアヌスが下痢（diarrhea）で亡くなり、ローマ皇帝を受け継いだ彼の長男ティトゥスである。

ローマ帝国皇帝ティトゥス（Titus Flavius Sabinus Vespasianus, 39.12.30-81.9.13：在位78-81）は、ローマ都市内での市政（紀元79年8月24日のベスピオ火山の噴火とポンペイへの救助活動、市内の大火、エルサレムの略奪とその凱旋を催すコロシアムの完成）に気が取られ、ブリタニア北部への関心が薄らいでおり、北部への進撃を、一時頓挫させていた。

皇帝ティトゥスが熱病（fever）でなくなると、次にローマ皇帝を受け継いだのは、ローマ帝国皇帝ウェスパシアヌスの2男であり、またローマ帝国皇帝ティトゥスの弟であるドミティアヌスである。

ローマ帝国皇帝ドミティアヌス（Titus Flavius Domitianus, 51-96在位81-96）は、ブリタニア北部への関心が強く、再度、ブリタニア総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラに、ブリタニア北部への侵攻を命じた。

この命により、ブリタニア総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラは、紀元82年から83年にかけて、ブリタニア以北の非征服地に侵攻した。

そして、ブリタニア総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラは、その地に、原住民として、身体に青刺青や彩色を施した人びとを、ピクト族（the Picts：ラテン語で、身体にペインティングを施した人びと）と呼んだ。そして、そのピクト族は、居住地周辺に、プロホ（Brochs：円塔要塞、鉄器時代の砦）という‘ピクト＝タワー（Pictish towers）’を建て、大雑把に、ピクト王国（the Kingdom of the Picts）と呼べる集団定住地域を建設していた⁵⁾。

また、グナエウス＝ユリウス＝アグリコラ総督は、このブリタニア以北の非征服地を、カレドニア（Caledonia：緑樹林の地：現スコットランド）と呼んだ⁶⁾。

4) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, Reprinted of 2003, edition, Lomond, 2010, p. 27.

5) Cf. H. M. Chadwick, *Early Scotland: The Picts, The Scots & The Welsh of Southern Scotland*, Reprinted of 1949, edition, Cambridge University Press, 2013, p. xviii.

6) H. M. Chadwick, *Early Scotland, ibid.* p. xviii.

この時点で、後のイングランドであるブリタニアがローマ領になったにも関わらず、後のスコットランドであるカレドニアは、誰からも、またどの国からも、支配・征服されていなかった。

このカレドニアに住むピクト族は、バスク人のDNAを持つ現スコットランドの原住民である⁷⁾。

ローマ人は、この、バスク人のDNAを持つカレドニアのピクト族の激しい抵抗と、酷寒による厳しい気候条件により、カレドニアの征服を断念した。

この時点で、ブリタニアのイングランドと、カレドニアのスコットランドとの亀裂が生じ始めた。

そこで本稿では、このスコットランド王国の統治計画を、エドワード1世が、どのように考え、どのように行っていたのかを、カレドニアの立ち位置、ウェイルズの併合を踏まえ、考察する。

II カレドニア

氷河期末期の紀元前9,000年頃、グレート＝ブリテンがヨーロッパ大陸と陸続きであった頃、北部に、獲物を求めて狩猟民が、遣ってきていた。

この北部に遣ってきた狩猟人たちは、文字や認識できる言葉を持っていなかったため、ただ単に発する言葉として、自身の住む場所を、アルバ（Alba: 白い大地）と言っていた。

このアルバ、すなわち白い大地という言葉は、紀元前9,000年当時、この地域は、氷河に覆われ、辺り一面、真っ白だったことから、発生した言葉である。

紀元前6,000年頃、グレート＝ブリテンが、大陸から切り離され、現在の地形になりつつあった。

7) Cristian Capelli, Nicola Redhead, Julia K. Abernethy, Fiona Gratrix, James F. Wilson, Torolf Moen, Tor Hervig, Martin Richards, Michael P. H. Stumpf, Peter A. Underhill, Paul Bradshaw, Alom Shaha, Mark G. Thomas, Neal Bradman, and David B. Goldstein, "A Y Chromosome Census of the British Isles," *Current Biology*, Vol. 13, Issue 11, p. 981.

この頃、ヨーロッパ大陸から、グレート＝ブリテンに渡ってきた狩猟民も、大陸とグレート＝ブリテンとの割れ目の石灰質の大地、すなわち白亜の大地、現イングランド南東部イーストボーン（Eastbourne）海岸地帯のセブン＝シスターズ（Seven Sisters）を見て、伝承されていたアルバ（Alba）という言葉を使った。

このアルバという言葉は、その後、さらに伝承され、ゲール語になった。

すなわち、このアルバというゲール語は、ピクト族の最初の王、413年のドルスト1世（Drust I, Pictish king：在位413-451）から、スコット族のケネス1世（Kenneth MacAlpin, 810-858.2.13：在位843-858）が、843年に、ピクト族を統合し、アルバ王国（Alba）を建国した時の語源になっていったのである⁸⁾。

その後、紀元前4000年頃、グレート＝ブリテン北部に、イベリア半島から、農業の技術を持ったヨーロッパ大陸原住民、非インド＝ヨーロッパ語族のバスク人（Basque：Vascos）が流入、定住し⁹⁾、そのまま、グレート＝ブリテン北部の原住民になっていった。

このことは、現スコットランド人の男性のDNAが、スペイン北部のバスク人と同じ、男系のY染色体（Y-chromosome）を持っていることから、判明できる¹⁰⁾。

紀元前600年から400年頃、中央ヨーロッパから、好戦的なケルト系のピクト族が、グレート＝ブリテン北部に移動し、バスク人のDNAを持つ原住民に影響を与えていった。

このグレート＝ブリテン北部の原住民は、ケルト文化を取り入れ、しだいにピクト族と同化していった。

すなわち、バスク人のDNAを持つ原住民と同化していったピクト族が、

8) Cf. H. M. Chadwick, *Early Scotland, op. cit.*, p. xvi and p. 8.

9) Cliff Hanley, *History of Scotland*, Reprinted of 1986, edition, Lomond Books, 1995, p. 8.

10) Cristian Capelli, Nicola Redhead, Julia K. Abernethy, Fiona Gratrix, James F. Wilson, Torolf Moen, Tor Hervig, Martin Richards, Michael P. H. Stumpf, Peter A. Underhill, Paul Bradshaw, Alom Shaha, Mark G. Thomas, Neal Bradman, and David B. Goldstein, *Current Biology*, Vol. 13, Issue 11, op. cit., p. 981.

現スコットランドの原住民になっていったのである¹¹⁾。

なお、1320年のスコットランド独立宣言、アープロース宣言 (the Declaration of Arbroath) で、謳われているグレート＝スキタイ (Greater Scythia) からスコットランドに来た人たちとは¹²⁾、イベリア半島北部の先住民と、ピレネー山脈 (Pyrénées) 近辺のバスク人とが同化した人びとである、と解釈できる。

このグレート＝スキタイのスキタイが、スコットランド人に関連があると最初に指摘した研究者は、イングランドの神学者ベダ (Venerable Bede, c. 673-735) である¹³⁾。

また、このバスク人のDNAを持つ原住民は、ヒベルニア (HIBERNIA : アイルランド) の東海岸ダル＝リアダ (DAL RIADA) に定住し、そしてその後、アルバ (スコットランド) に定住していった民族である¹⁴⁾。

グレート＝ブリテン北部の原住民と融合していったピクト族は、海からの侵入者を防ぐために、つまり南部の自身たちの居住地を守るために、北部および東部の沿岸地域、さらに北部の島々に、強力な軍事的前哨地として、紀元前200年頃、プロホという円筒の要塞を建て、居住地での勢力を拡大させていった。

そして、ピクト族は、そのグレート＝ブリテン北部に、勢力を拡大し、自分たちの集団を、大雑把に、ピクト王国 (the Kingdom of the Picts)、またはピクトランド (Pictland : ピクト族の王国) という名称にした。

このピクトランドと、その同盟族とが、現在のスコットランドを形成していった¹⁵⁾。

11) Cf. A. A. M. Duncan, *Scotland: The Making of the Kingdom*, The Edinburgh History of Scotland, Vol. 1, Reprinted of 1975, edition, OLIVER & BOYD, 1978, p. 8.

12) Edward J. Cowan, “*For Freedom Alone*”: THE DECLARATION OF ARBROATH, 1320, Reprinted of 2003, edition, Birlinn, 2008, p. 146.

13) Venerable Bede, *A History of The English Church and People*, Translated and with an Introduction by Leo Sherley-Price, Revised by R. E. Latham, Reprinted of 1955, edition, the Penguin Classics, 1975, pp. 38-39.

14) Cf. A. A. M. Duncan, *Scotland*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 8.

15) H. M. Chadwick, *Early Scotland*, *op. cit.*, p. xviii.

やや安定時期を迎えていたこのピクトランドに、突如として、好まれない大量の侵入者が遣ってきた。

いわゆる、ローマ軍 (the Roman legions) の侵入である。

ローマ帝国皇帝クラウディウス (Tiberius Claudius Drusus Nero Germanicus, 10 BC-AD 54：在位41-54) は、あくなき野望のため、すなわち領土拡大と、ヨリ多くの食糧確保のため、ローマ軍に、紀元43年、グレート＝ブリテン侵攻を命じた。

そして、ローマ軍は、グレート＝ブリテンの約3分の2を征服し、その征服した地を、ロー帝国属領ブリタニア州にした。

その後、ローマ帝国皇帝ウェスパシアヌス (Titus Flavius Vespasianus, 9.11.17-79.6.23：在位69-79) は、さらなる領土拡大のため、ブリタニア総督グナエウス＝ユリウス＝アグリコラ (Gnaeus Julius Agricola, c. 40.7.13-93.8.23) にブリタニア北部の非征服地への侵攻を、紀元79年に命じた。

そして、グナエウス＝ユリウス＝アグリコラ総督は、紀元79年春、ブリタニア北部の非征服地に進撃した。

この進撃中に、グナエウス＝ユリウス＝アグリコラ総督は、ピクト族の住むピクトランドという名称を、不毛なU字溪谷の高原地に、広大な深緑の樹木が続くのを見て、カレドニア (Caledonia：緑樹林の地：現スコットランド) という名前に変えた。

だが、この進撃中にローマ帝国皇帝ウェスパシアヌスが、紀元79年6月23日に、ウイルス性の極度の下痢 (diarrhea) で亡くなってしまった。

父ウェスパシアヌス帝の後を引き継いだのは、長男のティトゥスである。

ティトゥスは、ローマ帝国皇帝ティトゥス (Titus Flavius Sabinus Vespasianus, 39.12.30-81.9.13：在位78-81) になり、国政を司ったのであるが、カレドニアへの進撃については、あまり関心がなかった。というのは、紀元80年、コロシウム完成でのオープニングセレモニーの中で、ティトゥス帝が、カレドニアの存在について触れなかったからである¹⁶⁾。

ローマ帝国皇帝ティトゥスにとって、カレドニアへの進撃よりも、ローマ

帝国の根幹をなすローマ都市内での市政に、精力を注がなければならない出来事があった。

それは、紀元79年8月24日のベスビオ火山の噴火救援と、エルサレム奪取による祝賀会である。

ティトゥス帝は、当然、皇帝職務として、ベスビオ火山の噴火により、壊滅状態になったポンペイの都市を、救援復興させなければならなかったし、また、紀元80年に、父ウェスパシアヌス帝より建設が続いていたコロシウムが完成したことにより、気掛かりであったエルサレムの占領凱旋パレードを開催させなければならなかった。

このような2つの先決重大事項に対処するため、ティトゥス帝は、カレドニアへの進撃を、一時中断させたのである。

ティトゥス帝が、紀元81年9月13日に、熱病 (fever) でなくなると、ウェスパシアヌス帝の2男であり、ティトゥス帝の弟であるドミティアヌスがローマ帝国皇帝に就いた。

ローマ帝国皇帝ドミティアヌス (Titus Flavius Domitianus, 51-96 : 在位 81-96) は、あくなき野望のため、すなわち領土拡大のため、再び、グナエウス=ユリウス=アグリコラ総督に、'グリーン=ライト (green light : 未開拓地光)' を放つカレドニア北部に進撃するよう命じた¹⁷⁾。

非征服地への侵攻命を受けたグナエウス=ユリウス=アグリコラ総督は、紀元82年、カムリ (Cymry : 現ウェイルズ) 経由で、強化された軍人25,000人を引き連れ、ブリタニア北部から、カレドニア南部に入った¹⁸⁾。

そして、ユリウス=アグリコラ総督は、カーライル (Carlisle) 近くの第9軍団ヒスパナ (Hispana) を、攻撃しているブリタニア北部の原住民ブリガンテス族 (Brigantes) を制圧し、フォース・クライド地峡 (Forth-Clyde

16) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland, op. cit.*, p. 30.

17) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland, ibid.* p.30.

18) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland, ibid.* p. 27.

line)以南まで侵攻した¹⁹⁾。

さらに、ユリウス=アグリコラ総督は、この第9軍団ヒスパナ (Hispana)をも引き連れ、陸上から、ローマ化に対抗するピクト族を、黒雲が低く垂れ籠め、刻一刻と天候が急変し、冷たいシャワー状の小雨が暴風となりうる不毛な高原地カレドニア北東部に追い詰めていった²⁰⁾。

また、さらにローマ遠征艦隊は、海上から北上し、カレドニア東部沿岸からピクト族を攻撃していった²¹⁾。

その結果、紀元84年夏、カレドニア北東部、グラウピウス (Graupius) で、ピクト族とローマ軍との戦争が勃発した。

いわゆる、モンズ=グラウピウスの戦い (The Battle of Mons Graupius) である²²⁾。

ピクト族の長であり、勇猛果敢な貴族カルガカス (Calgacus) 率いるピクト族は、南部方面から攻め寄って来るローマ遠征軍に対し、ローマ軍より遥かに劣った装備で立ち向かった²³⁾。

ピクト族のリーダー、カルガカスが率いる軍隊は、約30,000人、一方グナエウス=ユリウス=アグリコラ総督が率いる軍隊は、援軍8,000人、騎兵隊5,000人、不特定多数のローマ援軍兵、トータルで20,000人であった²⁴⁾。

ピクト族の方が人数で勝っていたが、軍の指揮命令系統が確立し、戦闘訓練が行き届いていたローマ遠征軍の勝利であった。

この勝利により、更なる領土拡大のため、カレドニア全土の征服を目指し、グナエウス=ユリウス=アグリコラ総督は、北への進撃を続けた。

19) Peter Salway, *A History of Roman Britain*, *op. cit.*, p. 107.

20) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *op. cit.*, p. 28.

21) Peter Salway, *A History of Roman Britain*, *op. cit.*, p. 107.

22) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *op. cit.*, p. 28.

23) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *ibid.*, p. 28.

24) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *op. cit.*, p. 29.

だが、この進撃中に、グナエウス＝ユリウス＝アグリコラ総督は、突如、紀元85年に、ドミティアヌス帝により、ローマへ召喚された。

その召喚理由は、カレドニアでのグナエウス＝ユリウス＝アグリコラ総督の輝かしい活躍に対して、ドミティアヌス帝が、嫉妬 (jealous) したからである²⁵⁾。

指揮官を失ったローマ遠征軍は、駐屯地を残し、カレドニア南部とブリタニア州北部との国境近くまで、撤退を余儀なくされた。

この撤退により、このモンズ＝グラウピウスの戦いというのは、カレドニア全土を征服した戦いということではなく²⁶⁾、ローマ軍に対抗するピクト族の勢力を鎮圧した戦い、ということになる。

ローマ遠征軍がいなくなったカレドニアでは、当然、ピクト族が勢力を盛り返していった。

このことは、ピクト族がカレドニアから南下し、ブリタニアのローマ軍の駐屯地を、たびたび襲撃したことからも判明できる。

そこで、当時のローマ皇帝たちは、ピクト族の南下を防ぐために、ローマ軍が、ウォールSEND (Wallsend) から、ボウネス＝オン＝ソルウェイ (Bowness-on-Solway) の120キロメートルに、大規模な石塁壁のハドリアヌスの長城 (Hadrian's Wall, 122 AD)²⁷⁾、また、ややピクト族の勢力を、カレドニア北部に押し上げることによって、クライド湾沿いのオールド＝キル

25) Matthew Bennett, Jeremy Back, Michael Brown, Christopher Durston, Simon Esmonde Cleary, Raymonde Gillespie, Reg Grant, Simon Hall, Martin Henig, Ian V Hogg, John Haywood, Ronald Hutton, Peter Martland, Janet L Nelson, Robert Peberdy, Michael Prestwich, Glyn Redworth, Sasha Roberts, Adrian Room, Joe Staines and Jason Tomes, by Editors, *The Hutchison Illustrated Encyclopedia of British History*, Reprinted of 1995, edition, Helicon, 1996, p. 4.

26) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *ibid.* p. 30.

27) R. G. Grant, Ann Kay, Michael Kerrigan, and Philip Parker, *History of Britain & Ireland*, Reprinted of 2011, edition, Dorling Kindersley, 2012, p. 27.

・ハドリアヌス長城のうち、ローマ砦が明確に観察できるところに、ハウステッド＝ローマ砦 (HOUSESTEADS ROME FORT) がある。このハウステッド＝ローマ砦は、国道B6318の駐車場から、北へ約500メートルのところにある。

パトリック (Old Kilpatrick) から、フォース湾沿いのボーンズ (Bo' nes) の65キロメートルに、芝土塁壁のアントニヌスの長城 (Antonine Wall, 142-144 AD)²⁸⁾ を築いたことから判明できる。

なお、この芝土塁壁のアントニヌスの長城は、石塁壁のハドリアヌスの長城のように、石の壁で高圧的に、ピクト族の侵入を防ぐという壁ではなく、芝の盛り土の上に木と枝で壁をしたもので、意図的にピクト族の侵入禁止した柵であった。

この2つの長城により、一時的にピクト族のカレドニア南下勢力を食い止めることができた。言い換えると、ローマ軍は、ブリタニア領からピクト族を、追い出したのである。

だが、紀元150年代になると、ピクト族が、頻繁に、アントニヌスの長城を超え、南下してくると、再度、ローマ軍と戦闘状態になった。

このピクト族とローマ軍との戦闘状態のなか、ローマ帝国内で異変が生じた。

それは、ローマ皇帝の皇位をめぐる争いである。

具体的には、ピクト族との戦闘状態の最中、192年12月31日、ローマ帝国皇帝ルキウス=アウレリウス=コンモドゥス=アントニウス (Lucius Aurelius Commodus Antonius, 161.8.31-192.12.31 : 在位180-192.12.31) が、愛妾マーシア (Marcia Aurelia Demetrias: mistress of Commodus) に毒殺されかけ、最終的には、近衛兵長官ラエトゥス (Quintus Aemilius Laetus: Prefect of the Praetorian) の命を受けた剣闘士ナルキッソス (Narcissus: Gladiator) によって、192年12月31日の夜、絞殺されたことから始まった²⁹⁾。

そして、その翌日、193年1月1日に、元老院と近衛兵の支持を得た、シリア総督のプブリウス=ヘルヴィウス=ベルティナクスが皇帝位を篡奪

28) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland, op. cit.*, p. 30.

・アントニヌスの長城の史料は、グラスゴー大学の図書館でみられる。また、スライド用のフィルムで、芝土塁の状況が観察できる。

29) Fergus Millar, *The Roman Near East 31 BC-AD 337*, Reprinted of 1993, edition, Harvard University Press, 1994, p. 120.

し、ローマ帝国皇帝プブリウス=ヘルヴィウス=ペルティナクス (Publius Helvisus Pertinax, 126.8.1-193.3.28 : 在位 193.1.1-193.3.28) になった。

また、その3か月後、193年3月28日、緊縮財政の失敗、慣例のドナティブム (donativum : 皇帝継承時に、各兵士に給付される特別金 : 皇帝即位時給付金) の支払い拒否で、元老院と近衛兵の支持を失ったペルティナクス帝が、近衛兵長官ラエトゥス命により、部下の近衛兵 (Praetorian guard) によって暗殺された³⁰⁾。

コンモドゥス帝とペルティナクス帝とを暗殺させた近衛兵長官ラエトゥスは、次期皇帝には、自分たちに有利な者になってもらうために、元老院には相談せず、単独で、「皇帝位競売 (Throne for Auction : Auction of the Empire)」を、宣言した³¹⁾。

この「皇帝位競売」に対し、すぐさま、ペルティナクス帝の義父ティトゥス=フラウィウス=スルピキアヌス (Flavius Sulpicianus) と、アフリカ総督マルクス=ディディウス=セウェルス=ユリアヌスとが名乗り出た。

結果は、上流階級出身で金銭的に裕福なアフリカ総督マルクス=ディディウス=セウェルス=ユリアヌス (Marcus Didius Severus Julianus, 133.1.30-193.6.1 : 在位 193.3.28-193.6.1) が、金に物を言わせ、競り落とし、自身の皇帝位獲得を、元老院に承認させ、法的に、皇帝に就いた³²⁾。

だが、この時、ディディウス=ユリアヌス帝は、金で皇帝位を篡奪したとして、市民から、また元老院からも信用を失った。また、当然として、ディディウス=ユリアヌス帝自身の近衛兵は、結果に満足し団結していたが、帝国内の統治、軍事力は、確固たるものでなくなっていった。

このディディウス=ユリアヌス帝の強引なやり方、「皇帝位競売」に対し、3名の総督が反旗を翻し、皇帝位を請求した。

30) S. Ireland, *Roman Britain*, A Sourcebook, Second edition, Reprinted of 1986, edition, Routledge, 1996, p. 101.

31) S. Ireland, *Roman Britain*, *ibid.* p. 101.

32) Peter Salway, *A History of Roman Britain*, Reprinted of 1993, edition, Oxford University Press, 1997, p.167.

すなわち、その3名の総督とは、パンノニア総督ルキウス=セプティミウス=セウェルス、シリア総督ガイウス=ベスケンニウス=ニゲル（Galus Pescennius Niger, c. 135-194）、ブリタニア総督デキムス=クロディウス=アルビヌス（Decimus Clodius Albinus, c. 150-197.2.19）である³³⁾。

まず初めに、パンノニア総督ルキウス=セプティミウス=セウェルスが、公然と、ディディウス=ユリアヌス帝に戦いを挑んだ。

そして、元老院と市民の支持を得たパンノニア総督ルキウス=セプティミウス=セウェルス（Lucius Septimius Severus, 146.4.11-211.2.4：在位193.4.9-211.2.4）が、指揮命令系統が弛緩し、軍事力が衰えていたディディウス=ユリアヌス帝軍を破り、193年4月9日、皇帝に就いた。

193年の「皇帝位競売」前では、カレドニアでは、何ら変化がなく、依然とローマ軍が駐留し、ピクト族と交戦状態のままであった。

だが、ブリタニア総督であったデキムス=クロディウス=アルビヌスが、193年に、野心にかられ、皇帝を宣言した時³⁴⁾、対峙しているカレドニア内のピクト族に変化が現れた。

それは、デキムス=クロディウス=アルビヌスが、セプティミウス=セウェルス帝と戦うため、カレドニア内にいる駐留軍を、ブリタニアに呼び集めたからである。

このことにより、カレドニアのピクト族と、ブリタニアのローマ軍との軍事的緊張が、多少ゆるんだ。

デキムス=クロディウス=アルビヌスが、軍事力を強化していることを察知したセプティミウス=セウェルス帝は、皇帝僭称者クロディウス=アルビヌスに対し、懐柔策として、193年、彼にカエサル（‘Caesar’：a junior emperor：副帝）の称号を与えるという約束³⁵⁾、抗争を避けた。

もう1人の皇帝位僭称者ガイウス=ベスケンニウス=ニゲルに対しは、セ

33) S. Ireland, *Roman Britain, op. cit.*, p. 101.

34) Peter Salway, *A History of Roman Britain, op. cit.*, p. 167.

35) Peter Salway, *A History of Roman Britain, op. cit.*, p. 168.

・S. Ireland, *Roman Britain, ibid.* p. 102.

プティミウス=セウェルス帝は、抗争を選び、194年、イッススの戦い（Battle of Issus）で、彼を戦死させた³⁶⁾。

シリア総督ガイウス=ベスケンニウス=ニゲルを戦死させたのち、セプティミウス=セウェルス帝は、カエサル（副帝）の称号を持つクロディウス=アルピヌスが、自身の称号に満足せず、皇帝の座を狙っている、という情報を得た。

セプティミウス=セウェルス帝は、副帝クロディウス=アルピヌスの野心を砕くために、彼の暗殺を計画した³⁷⁾。

このことを実行するため、セプティミウス=セウェルス帝は、副帝クロディウス=アルピヌスとの約束を、一方的に反故にした。

これに対し、納得のいかないクロディウス=アルピヌスは、再度、皇帝を僭称し、自身の軍隊を引き連れ、197年ブリタニアからガリア（Gallia : Gaul: 現北イタリア、フランス、ベルギー）に渡り、セプティミウス=セウェルス帝との戦いに臨んだ。だが、クロディウス=アルピヌスは、ライオンの戦い（Battle of Lyons）で、大敗北し、197年2月19日、自決した³⁸⁾。

クロディウス=アルピヌスの自決により、197年、ブリタニアは、セプティミウス=セウェルス帝の支配下にはいった。

そして、セプティミウス=セウェルス帝は、ブリタニアの治安強化として、ブリタニア北部の国境、芝土累壁のアントニヌスの長城の復旧に取り掛かった。

だが、カレドニア国境近くでのローマ軍の軍事力が衰えていて、より一層、ピクト族がブリタニア北部まで南下してきていた。

ピクト族は、国境近くの原住民ブリガンテス族（Brigantes）と協力し、ハドリアヌスの長城の壁を破り、現ヨーク（York）のイーボラカム（Eboracum）まで侵攻した。

そこで、セプティミウス=セウェルス帝は、205年、石累壁のハドリアヌ

36) Peter Salway, *A History of Roman Britain, op. cit.*, p. 168.

37) Peter Salway, *A History of Roman Britain, ibid.* p.168.

38) S. Ireland, *Roman Britain, op. cit.*, p. 106.

スの長城を修復し、カレドニア内からピクト族を南下させない軍事強化を図った。

ゴール（Gaul:ガリアGallia）とブリタニアとの反乱を、ローマ軍が鎮圧し、ローマ帝国内に多少の平和が訪れた時、当時の両皇帝、リキニウス（Licinius, 308-324）と、コンスタンティヌス1世（Constantinus I, 308-337）とが、313年、ミラノ勅令（Edict of Milan）にて、迫害していたキリスト教を、ブリタニアにおいて公認した。

この公認は、当然、カレドニアにおいても、キリスト教徒という侵入者が入ってくるということを意味していた。

また、300年中頃に、ピクト族の住むカレドニアに、更なる侵入者が、入ってきた。

その侵入者たちは、ヒベルニア（HIBERNIA：アイルランド）からカレドニア西部に渡ってきたスコット族（Scoti）、ブリタニア北部からカレドニア南西部に遣ってきたブリトン族（Britons）、ドイツ北部から北海を渡りカレドニア南東部に遣ってきたアングル族（Angles）である³⁹⁾。

なお、このヒベルニア（アイルランド）から遣ってきたスコット人は、バスク人と同じ、男系のY染色体（Y-chromosome）のDNAを持っている人たちである。

カレドニア原住民のピクト族は、スコット人、ブリトン人、アングル人と協力して、ローマ遠征軍と戦い、芝土塁壁のアントニヌスの長城を越え、石塁壁のハドリアヌスの長城近くまで南下し勢力を拡大させていった。

そのことは、360年に、ピクト族とスコット族とが、ブリタニアの国境最前線を攻撃したことからわかる⁴⁰⁾。

また、367年から369年にかけては、ピクト族、カレドニアの少数民族アタコッティ族（Attacotti）、スコット族が協力し、北部ブリタニアを攻撃し⁴¹⁾、

39) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland, op. cit.*, pp. 33-35.

40) Peter Salway, *A History of Roman Britain, op. cit.*, p. 271.

41) Peter Salway, *A History of Roman Britain, ibid.* p. 279.

北部軍司令官フローファウデス (Fullofaudes, dux Britanniarum, d. 367) を包囲、拘束、殺害した⁴²⁾。

なお、この367年から369年は、フランク族とサクソン族が、ゴール (Gaul: ガリア Gallia) に侵入してきた年でもある。

このようなことに対し、ブリタニアの秩序回復のため、ヴァレンティニアヌス1世 (Flavius Gratianus Valentinianus I, c. 321-375.11.17: 在位364-375) の命を受け、ローマの将軍テオドシウス (Flavius Theodosius, the elder, comes: ラテン語の伯爵) が、派遣された⁴³⁾。

ブリタニアに派遣されていた司令官マグヌス=マクシム (Magnus Maximus, c. 355-388.8.28) が、382年に、ピクト族の制圧に成功した⁴⁴⁾。

この成功に気を良くしたマグヌス=マクシム司令官は、383年に、自ら皇帝と称し、野望のため、ブリタニアの駐留軍の1部を引き上げ、大陸に戻った⁴⁵⁾。

このブリタニアの駐留軍の1部を引き上げにより、カレドニアでのキリスト教徒の布教活動が、盛んになっていった。

すなわち、カレドニアへの布教活動を、最初に本格的に行っていったのは、聖ニニアン (Saint Ninian, 360-432) である。

カレドニアにとって、聖ニニアンを初めとするキリスト教布教者たちは、侵入者でもあった。

また、聖ニニアンと布教者たちの布教活動は、将来、北部カレドニアを統合させる礎を築いた。

駐留軍が縮小されたことに対し、カレドニアから、ピクト族、アタコッティ族、スコット族がブリタニアに南下し、またサクソン族が、勢いを増しブリタニア東部に侵入してきた。

42) S. Ireland, *Roman Britain, op. cit.*, p. 149.

・ Peter Salway, *A History of Roman Britain, op. cit.*, pp. 280-281.

43) Peter Salway, *A History of Roman Britain, ibid.*, p. 265.

44) S. Ireland, *Roman Britain, op. cit.*, p. 155.

45) S. Ireland, *Roman Britain, ibid.* p. 158.

このような攻撃、侵入に対し、当時のブリタニア総督フラウィウス＝スティリコ (Flavius Stilicho, c. 359-408.8.22) は、遠征隊を組織し、鎮圧に乗り出したが、功は奏さなかった⁴⁶⁾。

また、フラウィウス＝スティリコは、イタリア半島に侵入している西ゴート王アラリック1世 (the Visigothic king Alaric I, c. 370-410：在位395-410) の脅威に対し、本国の防衛強化を図るために、400年から402年にかけて、ブリタニアでの駐留軍や遠征軍を、後退や縮小させていった⁴⁷⁾。

その結果、西ローマ帝国皇帝ホノリウス (Flavius Augustus Honorius, 384.9.9-423.8.15：西ローマ皇帝在位395-423) は、409年、軍事的に空白地となったブリタニアでの完全なる撤退を行った⁴⁸⁾。

西ローマ帝国がカレドニアの直接支配を諦めた理由は、経済的な理由からである。

すなわち、領土を拡張するというよりも、その拡張ための軍事経費が掛かりすぎて、帝国にとってプラスにならなかったからである。

また、温かいところで育ったローマ人にとって、カレドニアの過酷な風土が合わなかったからでもある。

この409年に、ローマ帝国のブリタニア統治は、完全に、終焉を迎えた。

ローマ軍が撤退し終えた410年以降、カレドニアでは、北部のピクト族がアルバ王国 (ALBA)、西部のスコット族がダル＝リアダ王国 (DAL RIADA) 東部のアングル族がロジアン王国 (LOTHIAN)、南西部のブリトン族がストラスクライド王国 (STRATHCLYDE) を建国し、勢力拡大のための抗争を繰り返していた。

聖ニニアンが、432年に亡くなった以降、カレドニアでは、4つの部族抗争のため、キリスト教の布教活動は、休止状態になっていた。

その後、キリスト教徒のセント＝コロンバ (Saint Columba, 521.12.17-597.6.9) が、563年に、郷里のアイランドからアイオナ島 (Iona) に亡命し、

46) Peter Salway, *A History of Roman Britain, op. cit.*, p. 314.

47) Peter Salway, *A History of Roman Britain, ibid.* p. 316.

48) Peter Salway, *A History of Roman Britain, ibid.* p. 569.

アイオナ修道院 (Monastery of Iona) を創設し、カレドニアで、本格的に精神的に、布教活動を行った⁴⁹⁾。

このことは、セント=コロンバが、アルバ王国であるピクトランドの族長ブライディ1世 (Brudei I: Bridel I, King of Picts: 在位536-586) を、キリスト教徒に、改宗させたことからわかる⁵⁰⁾。

5世紀半ば以降、アングル族がカレドニアにて、勢力を増してきた。

すなわち、アングル族は、600年にカタリック (Catterick) で、北部ブリトン人を、また、603年にデグサスタン (Degsastan) で、スコット族を制圧した。

このことに対し、原住民であるピクト族が、685年に、ネックタンスメア (Nechtansmere) で、スコット族を制圧した。

その後、キリスト教徒であるスコット族のダル=リアダ王ケネス=マカルピン (Kenneth MacAlpin, 810-858.2.13) が、843年にピクト族のアルバ王国を統合し、844年にケネス1世 (Kenneth I, スコットランド王在位: 844-858) になった。

言い換えると、ケネス1世は、スコットの国、スコットランド (Scotland) と、ピクトの国、ピクトランドとを、統合したのである。

統合できた最大の要因は、キリスト教徒の布教活動にあった。

両国とも、キリスト教が浸透していて、何ら問題がなかった。

この統合により、ケネス1世は、この統合した国を、カレドニアから、ゲール語でアルバ (Alba) 王国と称するようになった。

なお、ゲール語でのアルバ王国は、英語でのスコットランドである。

この時点から、アルバ王国であるスコットランドと、アングロ=サクソン (Anglo-Saxons) が支配するブリタニア (後のイングランド) とは、全く異なった独立国となった。

なお、スコットランド王ケネス1世は、6回ノーザンブリア (NORTHUMBRIA)

49) A. A. M. Duncan, *Scotland*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 43.

50) A. A. M. Duncan, *Scotland*, Vol. 1, *ibid.*, p. 46.

に侵攻し、アングル族とブリトン族とを、ツイード川 (the river Tweed) 以南まで追っ払った。

その後、ブリタニア南部は、フランスのノルマンから遣ってきたノルマンディー公ウィリアム (William I, the Conqueror, c. 1027-1087.9.9：在位1066-1087) により征服され、イングランドが創設された。

イングランド王になったウィリアム1世征服王は、自身の野望のため、グレート=ブリテン島 (Great Britain) の統一を目指した。すなわち、ウィリアム1世征服王は、グレート=ブリテン島の完全なる支配、統治を行うため、ウェイルズ、そしてスコットランドに目を向けた。

このウィリアム1世征服王が抱いた野望は、ヘンリー2世 (Henry II, Curtmantle, 1133.3.5-1189.7.6：在位1154-1189) 治世時、現実となった。

父ヘンリー2世の遺産相続をめぐって、2男のヤング=ヘンリー (Henry, Le Jeune：the Young King, 1154.2.28-1183.6.11) が不満を持ち、親族や下臣たちを巻き込み、1173年4月初旬、バロニアル=レヴォルト (Baronial Revolt) が勃発した。

この結果は、現職の王ヘンリー2世が優勢で、両者は、1174年12月8日、休戦のためのファレーズ協定 (Treaty of Falaise) を結んだ。

この時、2男のヤング=ヘンリー側についていたスコットランド王ウィリアム1世獅子王 (William I, the Lion, 1143-1214.12.4) は、このファレーズ協定により、イングランド王ヘンリー2世を、宗主として認め、オマージュ (homage：臣従の礼) を執り、忠誠の誓約をしなければならなくなった。

言い換えると、この時点から、スコットランド王国は、イングランド王国を宗主国としなければならなくなったのである⁵¹⁾。

51) Austin Lane Pool, *From Domesday Books to Magna Carta 1087-1216*, in George Clark, edition, *The Oxford History of England*, Vol. 3., Second Edition, Reprinted of 1955, ed., Oxford University Press, 1986, p. 277.

• George Burton Adams, *The History of England: from the Norman Conquest to the Death of John (1066-1216)*, in William Hunt and Reginald L. Poole, edited, *The Political History of England*, Vol. 2, reprinted of 1905, edition, AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 314.

• A. A. M. Duncan, *Scotland*, Vol. 1, op. cit., p. 230.

だが、リチャード1世獅子心王 (Richard I, the Lion Hearted, Cœur de Lion, 1157.9.8-1199.4.6 : 在位1189.9.3-1199.4.6) 治世時になると、この忠誠の誓約が解消されたのである。

言い換えると、1174年12月8日のファレーズ協定 (Treaty of Falaise) が破棄され、スコットランド王国は、イングランド王国を、宗主国として認めるが、忠誠の誓約が解消され、オマージュを執らなくてもよくなったのである。

リチャード1世獅子心王は、莫大な経費が掛かる十字軍遠征費の1部として、1189年12月、スコットランドから、銀貨10,000マルクを得る代わりに、スコットランドとの忠誠の誓約を解消、すなわちファレーズ協定を破棄したのである⁵²⁾。

この破棄により、スコットランド王国は、イングランド王国を、宗主国として認めるが、忠誠の誓約が解消され、多少自由になった。だが、依然として、両王国のボーダー地方では、緊張関係が続いた。

そして、ヘンリー3世治世時になると、ヘンリー3世も、グレート=ブリテン島の完全なる支配、統治を行うため、意図的に、1251年12月26日、11歳の自身の長女マーガレット=オヴ=イングランド (Margaret of England, 1240.9.29-1275.2.26 : 後のエドワード1世の妹) を、スコットランド王ケネス1世 (Kenneth I) の直系の子孫、10歳のアレグザンダー3世 (Alexander III, 1241.9.4-1286.3.19 : 在位1249-1286) のもとに嫁がせた。

この結婚の前、ヘンリー3世は、アレグザンダー3世を、ナイト (Knight: 騎士) に叙し、自身に対しオマージュ (homage : 臣従の礼) を執らせていた⁵³⁾。

言い換えると、ヘンリー3世は、アレグザンダー3世に対し、自身を封建領主として認めさせ、逆に、アレグザンダー3世を、自身の下臣として認め

52) Andrew Lang, *A History of Scotland : from The Roman Occupation*, Vol. 1, with a frontispiece, reprinted from the edition of 1903, AMS Press, Inc., 1970, p. 116.

53) Maurice Powicke, *The Thirteenth Century 1216-1307*, in George Clark, ed., *The Oxford History of England*, vol.4, Second Edition, Reprinted of 1953, edition, Oxford University Press, 1992, p.588.

たのである。

また、ヘンリー3世は、幼い国王アレクザンダー3世のために、後見人として、ジョン＝ベイリヤル (John Baliol, or Balliol, d. 1269) とロバート＝ドゥ＝ロス (Robert de Ros) とを当てた⁵⁴⁾。

この結婚は、スコットランドにとっては、平和と安定を得る結婚であったかもしれないが、イングランドにとっては、政略結婚であった。

この政略結婚は、その後、エドワード1世が、スコットランドの王位継承権に介入しようとする要因になったり、また、スコットランドがイングランドから完全に独立しようとする第1歩ともなったりした。

というのは、エドワード1世は、イングランド王戴冠後、父と同様、スコットランド王国の宗主として、アレクザンダー3世に対して、オマージュを執らせていたからである⁵⁵⁾。

アレクザンダー3世とマーガレット＝オヴ＝イングランドとの間に、1261年2月28日に、長女マーガレット＝オヴ＝スコットランド (Margaret of Scotland, 1261.2.28-1283.4.9) が誕生した。

その10年後の1272年に、イングランド王位に就いたエドワード1世は、ウィリアム1世征服王以来、イングランド王の宿願であったグレート＝ブリテン島の統一を、本格的に武力でもって実行しようとした。

まずは、ウェイルズへの支配であった。

Ⅲ ウェイルズ併合

アングロ＝サクソン系のマーシア王オッフア (Offa, d. 796：マーシア王、在位757-796) は、757年に王位に就くと、王権拡大のため、東南イングランドの征服を目指し、ケルト系のブリトン人を、王領から追い出し始めた。

だが、その征服に手を焼いたオッフア王は、西に追いやったケルト系のブリトン人との間に、799年に、土と石の防塁を築いた。

54) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. IV, *ibid.* p. 582 n. 1.

55) A. A. M. Duncan, *Scotland*, Vol. 1, *op. cit.*, pp. 590-591.

いわゆるオッフアの防塁 (Offa's Dyke) である。

このオッフア防塁の西側、カムリ (ウェイルズ) では、ケルト系のブリトン人たちが、グウィネズ (Gwynedd)、ポウイス (Powys)、ケレディギオン (Ceredigion)、ディヴェッド (Dyfed)、グラモーガン (Glamorgan) の部族小王国を形成していた。

オッフアの防塁以西、険峻な山地に追いやられたケルト系ブリトン王たちは、危機感を持ち、一致団結する機運が高まってきた。

カムリ (ウェイルズ) の主要国であったグウィネズに、メルヴィン=ヴリッフ (Merfyn Frych ap Gwriad, c. 780-844 : グウィネズ王825-844) が、825年に、王位に就いた。

部族小王国に危機感を持ったグウィネズのメルヴィン=ヴリッフ王は、隣国ポウイスのカデル=アブ=ブロックウェル王 (Cadell ap Brochwel, c. 745-809) の娘ネスト=フェルチ=カデル (Nest ferch Cadell, c. 770-836) との政略結婚により、ポウイス国での影響力、すなわち権勢を拡大させ始めた。

また、その息子のロドリ=マウア王 (Rhodri Mawr, c. 820-878 : ロドリ大王 Rhodri the Greats : グウィネズ王844-878 : ポウイス王855-878) も、隣国セレヂジョン王国 (Kingdom of Ceredigion : サイシスウグ Seisyllwg) のアンガーラド王女 (Angharad ferch Meurig, 835-?) との政略結婚で、グウィネズ王国を拡大させていった。

すなわち具体的には、ロドリ=マウア王は、母ネストの出身地であるポウイスを855年に⁵⁶⁾、妻の出身地であるセレヂジョン (サイシスウグ) を872年に⁵⁷⁾、グウィネズ王国に併合していったのである。

このように、グウィネズ王国のロドリ=マウア王が、カムリ (ウェイルズ) において、権勢を拡大させ、ロドリ大王というタイトルを得たのであるが、それは、1部の部族小国家を統一させたのであって、カムリ (ウェイルズ) 全体を統一させたものではなかった。

56) Roger Turvey, *Twenty-One Welsh Princes: the rulers and ruling families of medieval Wales*, Gwasg Carreg Gwalch, 2010, p. 21.

57) Roger Turvey, *Twenty-One Welsh Princes*, *ibid.*, p. 22.

その後、12世紀後期まで、大王というタイトルを得た王が出たが、いずれもカムリ（ウェイルズ）全体を統一させたプリンス=オヴ=ウェイルズ（Prince of Wales：ウェイルズ大公）というタイトルを得た王は出なかった。

その後、12世紀後期のウェイルズ（カムリ）においては、東南部でのイングランド=マーチ伯爵（Marcher Lords）の勢力地を除き、後に大ルウェリン（Llywelyn the Great）と称せられたグウィネズ（Gwynedd）地方ノルウェイリン=アプ=イオーワース（Llywelyn ap Iorwerth：Llewelyn ap Iorwerth：大ルウェリン Llywelyn Fawr：ルウェリン1世 Llewelyn I, c. 1173-1240.4.11：在位 Gwynedd, 1195-1240：在位 Powys, 1216-1240：在位 Prince of North Wales, 1194-1240）が、武力でウェイルズの覇権を握り、プリンス=オヴ=ノースウェイルズ（Prince of North Wales：北ウェイルズ大公）というタイトルを名乗ることができた。

ルウェリン=アプ=イオーワースの最初の息子グリフィズ=アプ=ルウェリン（Gruffydd ap Llywelyn, c. 1198-1244.3.1）は、ウェイルズ法に則り、王位継承を主張したが、妾タングウィストル（Tangwystl “Goch” verch Llywarch, 1168-1226.3.30）との子であるということから、また結婚自体が教会から認められておらず⁵⁸⁾、王位を継承できなかった。

王位を継承したのは、自身ルウェリン=アプ=イオーワースと、ジョン欠地王（John, Lackland, 1167.12.24-1216.10.19：在位 1199-1216）の庶子ジョアン（Joan：ジョアンナ Joanna, c. 1188-1237.2.2）との間にできた息子ダフィズ=アプ=ルウェリン（Dafydd ap Llywelyn, c. 1206-1246.2.25：在位 Gwynedd, 1240-1246）である⁵⁹⁾。

グウィネズの王位を継承したダフィズ=アプ=ルウェリンは、1244年に自分自身に対し、プリンス=オヴ=ウェイルズ（Prince of Wales：ウェイルズ大公）というタイトルを用いるようにした。だが、ヘンリー3世との戦争中に、子供の後継者なく、1246年2月25日、突然死した⁶⁰⁾。

この突然死により、グウィネズの王位継承権は、グリフィズ=アプ=ルウェ

58) Roger Turvey, *Twenty-One Welsh Princes*, *ibid.* p. 83.

リンに行くはずであったが、彼は、反逆罪でロンドン塔に幽閉されており、そのロンドン塔からの逃亡中、転落死（1244年3月1日）によって、すでに亡くなっていた⁶¹⁾。

このことにより、グウィネズの王位継承権は、ルウェリン=アプ=イオーワースの孫であり、グリフィズ=アプ=ルウェリンの2男、ルウェリン=アプ=グリフィズ（Llywelyn ap Gruffudd：最後ノルウェイリン王Llywelyn the Last：ルウェリン2世Llywelyn II, c. 1223-1282.12.11：在位Prince of Wales, 1246-1282）に移った⁶²⁾。

ヘンリー3世にとって、喜ばしい情報があった。

それは、アレグザンダー3世のもとに嫁がせた娘マーガレット=オヴ=イングランドに、長女マーガレット=オヴ=スコットランド（Margaret of Scotland, 1261.2.28-1283.4.9）が1261年2月28日に生まれたことであった。

このことは、その後のエドワード1世が、スコットランドの王位継承権により介入しやすくなった、ということの意味していた。

そしてウェイルズでは、ルウェリン=アプ=グリフィズが、ウェイルズの治安を守るため、1267年9月29日、イングランドとの和平条約であるモンゴメリー条約（the Treaty of Montgomery）を締結した。

このモンゴメリー条約により、ルウェリン=アプ=グリフィズは、イング

59) ウェイルズ法によると、親の遺産は、長男が相続する。王権も長男が相続する。このウェイルズ法が適用されるならば、北ウェイルズ大公ルウェリン=アプ=イオーワースの後継者は、彼の長男グリフィズ=アプ=ルウェリンであった。だが、イングランド王ヘンリー3世にとっては、このウェイルズ法が不都合であった。というのは、政略結婚によって、ウェイルズを支配しようとしたからである。具体的には、ジョン欠地王の庶子ジョアンを、ルウェリン=アプ=イオーワースと結婚させたことである。そして、グリフィズ=アプ=ルウェリンより後に生まれたジョアンの息子ダフィズ=アプ=ルウェリンを、ヘンリー3世は、北ウェイルズ大公ルウェリン=アプ=イオーワースの後継者として、1220年に認めた。また、母ジョアンは、息子ダフィズ=アプ=ルウェリンの地位を、確定するために、ローマ教皇ホノリウス3世（Honorius III, 1148-1227.3.18：在位1216-1227）によって法的に認めてもらった。・Cf. A. D. Carr, *Medieval Wales*, St. Martin's Press, 1995, p. 58.

60) A. D. Carr, *Medieval Wales*, *op. cit.*, p. 61.

61) A. D. Carr, *Medieval Wales*, *ibid.* p. 61.

62) Roger Turvey, *Twenty-One Welsh Princes*, *op. cit.*, p. 99.

ランド王ヘンリー3世を君主とし、ヘンリー3世に対しオマーージュ (Homage: 臣従礼) を執らなければならなくなった。また、その代価として、ルウェリン=アプ=グリフィズは、ヘンリー3世から、プリンス=オヴ=ウェイルズ (Prince of Wales) のタイトル使用が認められ、独立性の高いウェイルズ公国 (Principality of Wales) が成立した。

その後、イングランドでは、王位が、ヘンリー3世から、エドワード1世に移った。

イングランド王位に就いたエドワード1世は、ウェイルズ公国に対し、宗主権を持っていたので、そのウェイルズ公国を、自身の直轄領にし、イングランドに併合したかった⁶³⁾。

そこで、エドワード1世は、君主として、戴冠後、ルウェリン=アプ=グリフィズに対し、オマーージュを要求した。

だが、ルウェリン=アプ=グリフィズは、エドワード1世に対するオマーージュを拒否した。

この拒否は、ウェイルズ公国を統治しているルウェリン=アプ=グリフィズが、イングランドを統治しているエドワード1世と、同等の地位を持つと考えたからである。

この拒否は、反逆罪に当たるとして、激怒したエドワード1世は、即、武力でもって、ウェイルズへ侵攻し、征服し、併合することを決断した。

このウェイルズの征服は、ウィリアム1世征服王以来、イングランド王にとって宿願であった。

危険を感じたルウェリン=アプ=グリフィズは、グウィネズの自然の要塞地スノードニア (Snowdonia) 逃げ込み、またさらに、身を隠そうとした途中、中央ウェイルズ、ビルス (Builth) のオレウイン=ブリッジ (Orewyn Bridge: イーバン=ブリッジ Irfon Bridge) で見つかり、1282年12月11日に、殺害された⁶⁴⁾。

63) Plantagenett Somerset Fry, *The King & Queens of England & Scotland*, Reprinted of 1990, edition, A Dorling Kindersley Book, 1993, p. 52.

ルウェリン=アブ=グリフィズが殺害されると、プリンス=オヴ=ウェイルズのタイトルは、彼の弟ダフィズ=アブ=グリフィズ (Dafydd ap Gruffudd : David II ap Griffith, 1238-1283.10.3 : 在位 Prince of Wales, 1282-1283) が、継承した。

弟ダフィズ=アブ=グリフィズも、反逆罪として、イングランド軍に捕らえられ、1283年10月3日に、処刑された⁶⁵⁾。

エドワード1世は、プリンス=オヴ=ウェイルズのタイトルを持つダフィズ=アブ=グリフィズを、処刑することにより、ウェイルズ公国を征服し、1284年に、イングランドに併合することができた⁶⁶⁾。

だが、エドワード1世にとって、独立心の強いウェイルズ人、特に北ウェイルズのグウィネズ (Gwynedd) の人びとを統治、併合することは、困難を極めた。

そこで、エドワード1世は、併合を確実にものにさせるために、ウェイルズに対し、法的拘束力のあるガバメント (Government) ではなく、ウェイルズ人の自治を考慮したガバナンス (Governance: 統治) を行うことにした。

このことは、3つの理由からも判明できる。

第1は、グウィネズ地方を取り囲むようにして、アイアン=リング (Iron Ring : 鉄の円環) と呼ばれる多くの城塞を、建造、堅牢にしたことである⁶⁷⁾。

64) T. F. Tout, *The History of England: from the Accession of Henry III. to the Death of Edward III. (1216-1377)*, in William Hunt and Reginald L. Poole, edited, *The Political History of England*, Vol. 3, reprinted of 1905, edition, AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 163.

・Nicholas Hooper & Matthew Bennett, *Cambridge Illustrated Atlas Warfare*, The Middle Ages 768-1487, Cambridge University Press, 1996, p. 71

65) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 165.

66) Plantagenett Somerset Fry, *The King & Queens of England & Scotland*, *op. cit.*, p. 52.

67) エドワード1世は、ウェイルズの統治のため、北ウェイルズに城を建設した。だが、北ウェイルズのグウィネズの人びとは、独立心、愛国心が強いため、イングランドの統治に反抗的であった。そこでエドワード1世は、ルウェリン=アブ=グリフィズの殺害後、グウィネズの統治をより強化するために、グウィネズを取り囲むようにして多くの城塞、すなわちアイアン=リングと呼ばれる城塞を、建造、堅牢にしていた。このアイアン=リングの建造には、いかにグウィネズ地方の人びとの反抗が強かったかが、史実的に物語れる。

第2は、エドワード1世自身の17歳の王太子（後のエドワード2世：Edward II, 1284.4.25-1327.9.21：在位1307-1327）に、1301年にプリンス=オヴ=ウェイルズというタイトルを与えたことである⁶⁸⁾。

第3は、ウェイルズ人に対し、すべての公用語をイングリッシュにするのではなく、ウェイルズ語を残したことである⁶⁹⁾。

ウェイルズでの侵攻、征服、併合、ガバナンス方針が決まると、次にエドワード1世は、スコットランドへの侵攻、征服に動き出した。

IV スコットランド王位継承権介入

エドワード1世治世時、スコットランド王国ではケネス1世（Kenneth I）の直系の子孫、アレグザンダー3世（Alexander III, 1241-1285：在位1249-1285）が王位を継承し、“黄金時代”を築いていた。

だが、スコットランド王国のアレグザンダー3世は、イングランド王国のエドワード1世を、封建的宗主としていた⁷⁰⁾。

また、スコットランド王家、カンモー家（House of Kanmore）のアレグザンダー3世は、領土、領有権問題での宿敵、ヴァイキングであるノルウェイ王のホーコン4世（Haakon IV, King of Norway, c. 1204.4-1263.12.16）が、大艦隊を率いて、スコットランド西部に進撃してきたので、1263年10月2日、スコットランド南西部エアシャー（Ayrshire）のラーグズ沿岸で、大軍でもって迎え撃った⁷¹⁾。

68) エドワード1世は、は、ウェイルズ統治の核として、ウェイルズのカナヴォン城（Carnarvon Castle）で生まれた17歳の自身の王太子に、プリンス=オヴ=ウェイルズというタイトルを与えた。このことは、反逆心にえたぎるウェイルズ人の気持ちを、少しでも和らげるための政策であった。言い換えると、ウェイルズの君主として、ウェイルズで生まれた自身の王太子に、プリンス=オヴ=ウェイルズというタイトルを叙位しなければならないほど、イングランドに対するグウィネズ地方の人びとの反抗心が窺える。なお、このプリンス=オヴ=ウェイルズというタイトルの意は、小さな小国ウェイルズの君主、という意味である。

69) このウェイルズ語は、ウェイルズ内の高速道路、一般道路、公共施設、および掲示板など、英語標記の下に表記されている。

70) A. A. M. Duncan, *Scotland*, Vol. 1, *op. cit.*, pp. 590-591.

このラーグズの戦い (Battle of Largs) の結果は、闇夜に突撃するというノルウェイ軍の奇襲作戦にて、ノルウェイ軍の1兵が、裸足で「アザミ thistle」の棘を踏み、大声を出したことにより、飛び起きたスコットランド軍が逆襲したことにより、アレグザンダー3世軍が大勝した。

その3年後もの間、ホーコン4世は、王太子のマグヌス (Magnus) と共に、度々スコットランドに進撃したが、成果が上がらなかった。

力尽きたホーコン4世と王太子マグヌスは、スコットランドのアレグザンダー3世と、和平条約を締結せざるを得なくなった。

すなわち、戦勝国のアレグザンダー3世は、1266年、敗戦国のマグヌス6世 (Magnus VI, Hákonsson, 1238.5.1-1280.5.9 : 在位1263-1280) から、ヘブリディーズ諸島 (Hebrides) を含むウェスタン=アイルズ (The Western Isles) の領土と領有権を譲り受けるパース条約 (the Treaty of Perth) に締結した⁷²⁾。

スコットランド王国とノルウェイ王国との軍事的緊張が取れ、やや両国が平和的に時を過ごしていた時、アレグザンダー3世の妻マーガレット=オヴ=イングランド (ヘンリー3世の長女: エドワード1世の妹) が、1275年2月26日に亡くなった。

スコットランド王国とノルウェイ王国との更なる友好関係を講ずるために、アレグザンダー3世とマーガレット=オヴ=イングランドとの長女マーガレット=オヴ=スコットランドが、1281年に、ノルウェイ国王エイリーク2世マグヌソン (Eirik II, 1268-1299 : 在位1280-1299) と結婚した。

ノルウェイにとってこの結婚は、当然、スコットランドとの関係改善のための政略結婚であった。また、スコットランドにとっても、領土の拡大、領有権の画定、王国内の安定のための政略結婚であった。

マーガレット=オヴ=スコットランドとエイリーク2世マグヌソンとの間
71) · A. A. M. Duncan, *Scotland*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 579.

· Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *op. cit.*, p. 63.

72) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *op. cit.*, p. 64.

2015年6月 川瀬 進：エドワード1世によるスコットランド統治計画

に、ノルウェイ王女マルグレーテ (Margrete, 1283.4.9-1290.9.26：ノルウェイの乙女 The Maid of Norway：マーガレット Margaret：スコットランド女王 1286-1290) が、1283年4月9日に生まれた。

なお、ノルウェイ王女マルグレーテの出産直後、1283年4月9日に、母マーガレット=オヴ=スコットランドが、亡くなった。

アレグザンダー3世は、1281年6月に2男デイヴィッド (David, 1272.3.20-1281.6)、1283年4月9日に長女マーガレット (Margaret of Scotland：ノルウェイ国王エイリーク2世マグヌソンの最初の王妃 1261.2.28-1283.4.9)、1284年1月28日に長男アレグザンダー (Alexander, Prince of Scotland, 1264.1.21-1284.1.28) を亡くした。

長男で王太子のアレグザンダーが、子供を残さず死んだので、アレグザンダー家の男子直系が途絶えてしまった。

スコットランド王国の王位継承に危機感を持ったアレグザンダー3世は、スコットランド王国の重臣たちに対し、もし自分自身子供がなく、死んだならば、ノルウェイの乙女 (マーガレット：マルグレーテ) に忠誠を誓うよう宣言させた⁷³⁾。

この宣言は、もし自身に何かあった場合、スコットランド王国の王位を断絶させてはいけない、とするアレグザンダー3世の切なる遺言であった。

王位継承について、更なる危機感を持ったアレグザンダー3世は、1285年11月1日に、フランス貴族ドルー家のドルー伯ロベール4世 (Robert IV, Count of Dreux) の娘ヨランド=ドゥ=ドルー (Yolande de Dreux, 1263-1330.8.2) と再婚した。

再婚したアレグザンダー3世は、1286年3月18日、エディンバラ城で執務を終え、暗き暴風雨の夜に、妻のいるキングホーン (Kinghorn) 離宮に向かっている途中、フォース湾 (Firth of Forth) 対岸、ファイフ州沿岸 (Fife coast) のキングホーン (Kinghorn) で、乗っていた馬が崖から落ち、首の骨を折り、1286年3月19日に亡くなった⁷⁴⁾。

73) Andrew Lang, *A History of Scotland*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 124.

マーガレット＝オヴ＝スコットランド、およびアレグザンダー3世の逝去により、スコットランド王国は、王位継承について危機的状態に陥った。

また、そのことが原因で、王国内に不穏な動きが生じてきた。

それは、女子による王位継承の禁止を謳っているサリカ法 (Lax Salica) を楯にして、スコットランド王国の王位継承を請求してきた貴族が出てきたからである。

具体的には、5代目アナンデール伯ロバート＝ドゥ＝ブルース (Robert de Bruce, 5th Lord of Annandale, c. 1210-1295.3.31) であり、自身の血液関係が、王家に1番近いという主張であった⁷⁵⁾。

そこで、スコットランドでは、スコットランド王国の重臣たち、すなわち公爵、伯爵、男爵、大司教、司教、大修道委員長、修道院長たちによって、摂政議会 (The Council Regency) が開催され、アレグザンダー3世の遺言とおりに、早急に、スコットランド王家の唯一の血を引く、アレグザンダー3世の孫娘・ノルウェイ王女マルグレーテ (ノルウェイの乙女) を、スコットランド王国の王位継承権者マーガレットとして、指名した。

スコットランドの王位継承者になったマーガレット (ノルウェイの乙女) は、3歳であり、ノルウェイの王宮にいた。

そこで、スコットランド摂政議会は、マーガレット (ノルウェイの乙女) が、スコットランド王国に帰国するまで、摂政政治を託す6人の王国守護官たち (Custodians: 重臣 Guardians) を選び出した⁷⁶⁾。

なお、このスコットランドの摂政政治を行う重臣6人たちは、封建制度上の義務に則り、当然、スコットランド王国の宗主であるイングランド王エドワード1世に、承認を得なければならなかった。

74) ・Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *op. cit.*, p. 64.

・A. A. M. Duncan, *Scotland*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 593.

・Andrew Lang, *A History of Scotland: from The Roman Occupation*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 125.

・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 177.

75) Andrew Lang, *A History of Scotland: from The Roman Occupation*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 167.

この時、エドワード1世は、スコットランド王国に対し、政治的に容易に介入できた。

すなわち、スコットランド王国で、男子相続が絶え、また幼女のマーガレット（ノルウェイの乙女）がイングランド王位を継承した、という情報を得たエドワード1世は、この機を、スコットランドを併合・支配・統治するチャンスと捉えたのである。

スコットランド王国内が不穏な空気に包まれている間、父ノルウェイ国王エイリーク2世マグヌソンは、3歳の娘マーガレット（ノルウェイの乙女）を、スコットランドに行かせる気にはなれなかった。

だが、チャンスを得たエドワード1世は、4歳の自身の王太子エドワード（Edward：後のエドワード2世 Edward II, 1284.4.25-1327.9.21：在位1307-1327）と、3歳の女王マーガレット（ノルウェイの乙女）との婚姻を画策し、1289年に、両者の婚約を、スコットランド長老会議に強要した。

この両者の婚約を実現させるために、エドワード1世は、ノルウェイの使者とスコットランドの使者とを、イングランド南部のソールズベリー（Salisbury）に招き、イングランド主導の下、結婚条件を協議させた。

この協議の結果、両者の婚約は、即断されず次回持越しになったが、スコットランド王国が平和的ならば、結婚を前提として、1289年11月6日、6歳の女王マーガレット（ノルウェイの乙女）を、1290年11月1日の万聖節（ばんせいせつ：All Saints）までに、ノルウェイからスコットランドに移すことに同意したソールズベリー条約（the treaty of Salisbury）が、締結された⁷⁶⁾。

その後、ソールズベリー条約の運用について、つまりスコットランド王国

76) その王国守護官の6人とは、セント＝アンドリュース司教ウィリアム＝フレーザー（William Fraser, d. 1297）、ファイフ伯ドンチャンドー3世（Donnchadh III, the Earl of Fife）、バカン伯アレキサンダー＝カミン（Alexander Comyn, the Earl of Buchan, d. 1289）、パデノッホ領主ヨハネ2世＝カミン（John II Comyn, Lord of Badenoch, d. 1302）、グラスゴー司教ロバート＝ウィシャート（Robert Wishart, Bishop of Glasgow：在職1271-1316）、第5代スコットランド上級執事ジェームズ＝スチュアート（James Stewart, 5th High Steward of Scotland, c. 1260-1309.7.16）である。・Andrew Lang, *A History of Scotland: from The Roman Occupation*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 162.

・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 177.

の福利厚生に影響を与える諸問題について、エドワード1世の調停人・弁護士と、スコットランドの代表者とが、細部について協議された。

その協議の結果、協定が、スコットランドの人びとによって承認された。

すなわち、1290年3月14日、スコットランドの司教、伯爵、大修道院長、小修道院長、バロンたちが、ソールズベリー条約の協定書に同意するシールを押ししたのである。

そこで、同日1290年3月14日、スコットランドの4人の重臣と委員会は、6歳のスコットランド女王マーガレット（ノルウェイの乙女）と、エドワード1世の王太子エドワー＝オヴ＝カナヴォン（Edward of Caernarvon）との結婚に賛同するという趣旨の書状を、ノルウェイ国王エイリーク2世マグヌソンとイングランド王エドワード1世とに送った⁷⁸⁾。

両者の結婚をヨリ具体化するために、ダラム司教アントニー＝ベク（Anthony Bek, Bishop of Durham, d.1310）が、スコットランド南部バーガム＝オン＝トゥイード（Birgham-on-Tweed）に赴き、スコットランド王国の重臣代表と、条件交渉に当たった⁷⁹⁾。

この交渉は、両国の力関係により、一方的に、イングランドのダラム司教アントニー＝ベク主導の下、行われた。

この結婚の条件交渉の結果、1290年7月18日、スコットランド王国の法律、慣習、権利、自由、独立は、永久に維持されるが、もしマーガレット（ノルウェイの乙女）が、世継ぎなしに死んだならば、スコットランド王国は、イングランド王国に相続されるであろう、という条件のバーガム条約（the treaty of Brigham）が締結された⁸⁰⁾。

77) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 178.

・ Ronald Nicholson, *Scotland: The Later Middle Ages*, The Edinburgh History of Scotland, Vol. 2. Reprinted of 1974, edition, OLIVER & BOYD, 1978, p. 31.

・ Andrew Lang, *A History of Scotland: from The Roman Occupation*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 164.

78) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. IV, *op. cit.*, p. 599.

79) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 178.

・ Ronald Nicholson, *Scotland: The Later Middle Ages*, The Edinburgh History of Scotland, Vol. 2, *op. cit.*, p. 33.

このバーガム条約により、エドワード1世は、ヨリ平和的に法的に、スコットランドを併合・支配・統治できるようになった。

バーガム条約締結により、父ノルウェイ国王エイリーク2世マグヌソンは、7歳の娘・ノルウェイ王女・スコットランド女王マーガレット（ノルウェイの乙女）を、スコットランドに行かせることに同意し、王女は、1290年9月、ノルウェイのベルゲン（Bergen）からスコットランドに向かって出航した。

だが、この航海の途中、オークニー諸島（the Orkneys）を航行中に、暴風雨に逢い、7歳の幼女王マーガレット（ノルウェイの乙女）は、1290年9月26日、体調不良で、ベルゲン司教の両腕の中で、亡くなってしまった⁸¹⁾。

マーガレット（ノルウェイの乙女）の死により、スコットランド王国での王位継承権争いが、一層激しくなっていった。

スコットランド王国の王位継承について、有力視されているジョン＝ベリヤル（John Balliol, c. 1249-1314.11.25：在位1292-1296）、5代目アナンデル伯ロバート＝ドゥ＝ブルース（Robert de Bruce, 5th Lord of Annandale, c. 1210-1295.3.31）であった。

この両者は、自己主張を通すだけで妥協点が見つからず、ついに、彼らを含めて、王家に少しでも血縁のある者が、有力な封建領主たちの支援を受け、13人もの候補者たちが、名乗り出た。

だが、この13人の王位請求者たちは、誰1人とも、他の請求者たちを凌駕することができなかった。

そこで、有力な貴族たちは、スコットランド王国内での不穏な動き、王位継承争議を回避させるために、宗主国イングランドのエドワード1世に、仲

80)・T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 178.

・Ronald Nicholson, *Scotland: The Later Middle Ages*, The Edinburgh History of Scotland, Vol. 2, *op. cit.*, p. 33.

・Andrew Lang, *A History of Scotland: from The Roman Occupation*, Vol. 1, *op., cit.*, pp. 164-165.

81)・Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. IV, *op. cit.*, p. 601.

・Rosaling Mitchison, *A History of Scotland*, Second Edition, Reprinted of 1970, edition, Methuen, 1982, p.39.

裁に入ってもらい、次期スコットランド王を、裁定して戴くよう要請した。

この裁定の要請は、エドワード1世にとっては、スコットランド王の王位継承権の介入にとって、武力なしでの、絶好のチャンスであった。

早急に、1291年に、エドワード1世は、13人の王位請求者たちを、それぞれノーラム（Norham）に呼びつけた。

そして、エドワード1世は、それぞれノーラムに呼びつけた13人ものの王位請求者たちに対し、自身に対し、オマージュ（homage：臣従の礼）を執させた後、1人ひとり、国王を選ぶ法廷“グレート＝コウゼ（Great Cause：大訴訟）”を、1291年5月から開催させた⁸²⁾。

リチャード1世獅子心王治世時の1174年12月8日、ファレーズ協定（Treaty of Falaise）破棄により、イングランドとスコットランドとのオマージュが解消され、スコットランド王国は、イングランド王国を宗主国として認めるが、忠誠の誓約は、解消され、多少自由になっていた。

だが、13人の王位請求者たちがエドワード1世にオマージュを執ったということは、イングランド王エドワード1世を、スコットランド王国の宗主として、公的に認めたということである。

逆にいうと、エドワード1世が、13人の王位請求者たちに、オマージュを執らせたということは、スコットランドの重臣たちに対し、封建領主として、エドワード1世がスコットランド王国の宗主であることを、強制的に、確認させたということである。

この13人の内、より法廷的に有力視されたのは、スコットランド王ウィリアム1世獅子王（William I, the Lion, 1143-1214.12.4）の血統が絶えたので、当然、彼の弟であるハンティングダン伯デイヴィッド（David, Earl of Huntingdon, d.1219）の3人の娘の血統にある子孫たちである⁸³⁾。

すなわち、ハンティングダン伯デイヴィッドの長女マーガレット（Margaret, d. 1228）の血統を踏む曾孫ギャロウエイ伯ジョン＝ベイリヤル

82) Michael Prestwich, *The Three Edwards: War and State in England 1272-1377*, Second edition, reprinted of 1980, edition, Routledge, 2013, p. 36.

83) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 179.

(John Balliol, Lord of Galloway, c. 1249-1314.11.25：スコットランド王在位1292-1296)、2女イザベル (Isabel, d. 1251) の血統を踏む孫・第5代アナンデール伯ロバート＝ドゥ＝ブルース (Robert de Bruce, 5th Lord of Annandale, c. 1210-1295.3.31)、4女エイダ (Ada) の血統を踏む曾孫アバーガヴェニー伯ジョン＝ヘイスティングズ (John Hastings, Lord of Abergavenny, 1262-1313) である⁸⁴⁾。

このノーラムの地において、“グレート＝コウゼ”でのヒアリングの結果、1292年11月17日に、エドワード1世は、スコットランド王にジョン＝ベイリヤルを裁定した⁸⁵⁾。

裁定の基準は、当然、エドワード1世にとって有利な人物である。

王位継承権の筆頭に上がるのは、当然法的に表向きに、ギャロウエイ伯ジョン＝ベイリヤルである。

でも、エドワード1世が、3人のヒアリングをした結果、1番弱そうで、自身イングランド王に対し、1番従順な人物が、ギャロウエイ伯ジョン＝ベイリヤルであった。

このことが、エドワード1世にとって、最大なる裁定の基準であり、結果的に、ギャロウエイ伯ジョン＝ベイリヤルが選ばれたのである。

すなわち、この1292年11月17日のノーラムの裁定 (the Award of Norham) において、エドワード1世は、ギャロウエイ伯ジョン＝ベイリヤルを、スコットランド王に決定したのである。

ギャロウエイ伯ジョン＝ベイリヤルは、1292年11月30日 (セント＝アンドリュースの日 St. Andrew's Day) に、スクーンの石 (Stane o Scuin : Stone of Scone : Stone of Destiny=運命の石) の上で戴冠式を挙げ、法的に、スコットランド王になった。

裁定を下したエドワード1世は、スコットランド王ジョン＝ベイリヤルに対し、1292年12月26日、タインのニューキャッスル (Newcastle upon

84) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.* pp. 179-190.

85) Michael Prestwich, *The Three Edwards, op. cit.*, p. 41.

Tyne) で、封建制度上の義務に則り、再度、自身イングランド王エドワード1世に対し、オマージュ (homage: 臣従の礼) を強要させ、自身を、宗主として再確認させ、その地位を高めた。

このノーラムの裁定こそが、エドワード1世によるスコットランド王位継承権の最大なる介入であった。

V スコットランド侵攻

スコットランド王に就いたジョン=ベイリヤルは、第1回目の議会を、1293年2月、スコーン (Scone) で開催し、西部ハイランドとその周辺諸島、すなわちスカイ島 (Skye)、ローン (Lorne)、キンタイア (Kintyre) への政治権限拡大を可決させた⁸⁶⁾。

議会を開催させ、スコットランド王国を、無事、統治できると感じたジョン=ベイリヤルは、その後、宗主国のイングランド王エドワード1世から、スコットランド王国の存亡にも関わるような無理難題をふっかけられたり、またスコットランド貴族からも、言葉よる暴力を受けたりするようになっていった。

フランス王フィリップ4世=ル=ベル (Philippe IV, le Bel: 美男王 1268-1314.11.29: 在位 1285-1314) が、フランス王国内のイングランド領ガスコーニュ (Gascony) を、力尽で併合したことに対し、エドワード1世が、1294年6月に、宣戦布告した⁸⁷⁾。

この戦争に対し、エドワード1世は、ジョン=ベイリヤルに、スコットランド軍兵をフランスに送ることを強要したり、それに掛かる経費のため増税

86) · John Bannerman, MacDuff of Fife, in Alexander Grant and Keith J. Stringer, edited, *Medieval Scotland: Crown, Lordship and Community*, Essays Presented to G. W. S. Barrow, Edinburgh University Press, 1993, p. 37.

· Ronald Nicholson, Scotland: *The Late Middle Ages*, The Edinburgh History of Scotland, Vol. 2., Reprinted of 1974, edition, OLIVER & BOYD, 1978, p. 45.

· Fiona J. Watson, *Under The Hammer: Edward I and Scotland 1286-1306*, Reprinted of 1998, edition, John Donald, 2005, p. 18.

87) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 188.

を強制したりした⁸⁸⁾。

また、政権に関し、ジョン＝ベイリヤルがエドワード1世の意思のまま行動することから、トゥーム＝タバード (Toom Tabard：紋章なしの陣羽織を着た王：見掛け倒し王) というニックネームをつけられたりした⁸⁹⁾。

イングランド王エドワード1世に対するスコットランド王ジョン＝ベイリヤルの弱腰姿勢に対し、スコットランド王国の重臣であるビショップ、アール、バロンたちが、1295年7月に、王の名の下、極秘議会を開催させた。

その内容は、当然、エドワード1世による権力への抵抗であった。

スコットランド極秘議会は、エドワード1世への抵抗を議決し、そして、その助けとして、当時イングランドと戦闘状態にあったフィリップ4世美男王と同盟を結び、軍事協力を求めることであった。

そして、同スコットランド極秘議会は、1295年7月5日フィリップ4世美男王への軍事協力を得るべき交渉、そして条約締結のため、大使をフランスに向かわした⁹⁰⁾。

エドワード1世にとって、この無理難題は、当然、スコットランド王国の財源を減少させ、経済力を低下させ、その結果、軍事力を低下させるための政策であった。

エドワード1世は、スコットランド王国に対し、戦火を交えることなしに、最大限の権力を行使することにより、また最小限の軍事力を行使することにより、王国を弱体化させ、自国イングランドに併合させようとしたのである。

だが、宗主国イングランド王エドワード1世の行動・言動は、目に余るものがあり、エドワード1世に対し、スコットランド王ジョン＝ベイリヤルは、自身の生命と王国の存続のため、エドワード1世の要求を、すべて拒否し、そして、極秘会議の議決により、パリにて、1295年10月23日、フィリップ4世美男王と同盟条約、すなわちパリ条約 (Treat of Paris) を締結した。

88) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland*, *op. cit.*, p. 68.

89) Cliff Hanley, *History of Scotland*, *op. cit.*, p. 21.

90) Ronald Nicholson, *Scotland*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 47.

このパリ条約は、当然、スコットランドとフランスとの相互防衛協力同盟であり、後に ‘auld alliance : 古い同盟’ と呼ばれた同盟である⁹¹⁾。

その結果、スコットランド王ジョン=ベイリヤルは、イングランド王エドワード1世とのオマージュ (homage : 臣従の礼) を解消することができた⁹²⁾。

古い同盟、すなわち相互防衛協力同盟は、その後、フランスの慣習にスコットランドが従わなければならない、つまりスコットランド王国が、フランス王国の下臣になる、という意味を含んでいた⁹³⁾。

なお、このスコットランド王ジョン=ベイリヤルとフランス王フィリップ4世との同盟、相互防衛協力同盟である古い同盟’ は、極秘会談で行われたものであり、1295年10月23日当時、エドワード1世は、知る由もなかった。

エドワード1世が、この事実を知ったのは、スコットランド王国を征服後、政府の公文書記録を差し押さえた時であったと思える。

というのは、このパリ会談が極秘会談で行われていたもので、もし、エドワード1世がこの事実を知っていたら、すぐに、スコットランドに対し、軍事行動を行っていたと思われるからである。

また、当時、イングランド領ガスコニュ (Gascony) に対し、フランスと小競り合いをしていた時で、エドワード1世は、フランスの行動に対し、かなり神経を使っており、もしエドワード1世が、この事実を知っていたとするならば、パリ条約に対し、何らかのプレッシャー、あるいは阻止していたからである。

反旗を翻したジョン=ベイリヤルに対し、何か処罰を与えなければならないエドワード1世は、スコットランド王国に侵攻することを決定した。

そして、エドワード1世は、このスコットランド侵攻、対フランス、対ウェイルズのための戦費調達を、1295年11月、イングランドの大司教、司教、修

91) Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland, op. cit.*, p. 68.

92) Ronald Nicholson, *Scotland*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 47.

・Chris Tabraham, with photographs by Colin Baxter, *The Illustrated History of Scotland, op. cit.*, p. 68.

93) Rosalind Mitchison, *A History of Scotland, op. cit.*, p. 53.

道院長、貴族、各州から2名のナイト (knight: 騎士)、各都市から2名の市民を召集した模範議会 (“model parliament”) に求めた⁹⁴⁾。

スコットランドとフランスとの極秘交渉の情報を知らないまま、1296年3月1日、エドワード1世は、ジョン=ベイリヤルの態度が、封建制度上の義務をないがしろにする行為と判断し、彼を処罰するために、ボーダー地方の駐留軍を強化し、さらに封建的な軍隊イングランド軍を、タインのニューズ (Newcastle upon Tyne) 集合させた。

そして、その第1陣営を、スコットランド最大の商業港湾都市ベリウィック=アポン=トゥイード (Berwick upon Tweed) が、一望できる高台に構えた。

これに対し、ジョン=ベイリヤルは、1296年3月11日、多くの貴族から成るスコットランド軍を形成し、セルカーク (Selkirk) の北、4マイル離れたカッドシレア (Caddonlea) に陣取り、この闘争が、スコットランド王国が、イングランドとの封建制度を断ち切り、またイングランド王国から離れる独立戦争であることを、自由民兵たちに確認させた⁹⁵⁾。

1296年3月26日、スコットランド軍は、カーライル (Carlisle) を攻撃したが、エドワード1世に忠誠を誓った貴族が多いカーライルのため、防衛線を突破できず、失敗に終わった。

カーライルの知事は、第5代アナンデール伯ロバート=ドゥ=ブルースが、1295年3月31日に亡くなって、その後、1295年10月から、第6代アナンデール伯ロバート=ドゥ=ブルース (Robert de Bruce, 6th Lord of Annandale, 1243.6-1304.3.4) が、エドワード1世により任命された⁹⁶⁾。

第5代アナンデール伯ロバート=ドゥ=ブルースが、1292年11月30日 (セント=アンドリュースの日 St. Andrew's Day) に、スコットランド王国の王

94) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 195.

95) Ronald McNair Scott, *Robert the Bruce, King of Scot*, With an introduction by Peter Reese, Reprinted of 1982, edition, Canongate, 2014, p. 33.

・ Ronald Nicholson, *Scotland*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 48.

96) Ronald McNair Scott, *Robert the Bruce, King of Scot*, *op. cit.*, p. 33.

国守護官として、ジョン=ベイリヤルに、王位を授けたとき、自身の意図とは反するので、またジョン=ベイリヤルの下臣になりたくないため、すぐに、自身のすべての家督と権威を、長男の第6代アナンデル伯ロバート=ドゥ=ブルース (Robert de Bruce, 6th Lord of Annandale, 1243.6-1304.3.4) に相続した。

父のすべてのものを相続した第6代アナンデル伯ロバート=ドゥ=ブルースは、長男のロバート=ザ=ブルース (Robert the Bruce, 1274.7.11-1329.6.7: 後のロバート1世 Robert I: 在位 1306-1329) と共に、スコットランド王ジョン=ベイリヤルに、オマージュ (homage: 臣従の礼) を執っていない。

なお、カーライルの知事になった第6代アナンデル伯ロバート=ドゥ=ブルースは、父第5代アナンデル伯ロバート=ドゥ=ブルースも知事であっあので、カーライルの地形、地誌について熟知していて、防衛することができた。

カーライルが攻撃を受けたという情報を得たエドワード1世は、カーライル攻撃の報復のため、1296年3月28日、ベリウィック=アポン=トゥイードに、大攻撃を仕掛けた。

結果は、1296年3月30日、エドワード1世の大勝利で終わり、その地を征服した⁹⁷⁾。

エドワード1世は、約1カ月間近く、ジョン=ベイリヤルが降伏するまで、ベリウィック=アポン=トゥイードに駐留し、その町の防衛力を強化した。

エドワード1世は、1296年4月5日、ジョン=ベイリヤルから、忠誠の誓約であるオマージュを解消するメッセージを受け取った。

これに対して、エドワード1世は、スコットランド侵攻、征服という気持ち、一層掻き立てられた。

その間、スコットランド軍は、北に逃げ延び、ダンバー=キャッスル (Dunbar Castle) で避難を求めた。

97) ・ T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 196.

・ Fiona J. Watson, *Under The Hammer*, *op. cit.*, p. 25.

そのダンバー＝キャッスルは、もともとイングランド辺境伯の所有物であったが、その当時、スコットランド側に占領されていた。

この情報を得たエドワード1世は、ダンバー＝キャッスルを奪還するために、イングランド北部において、巨大な軍事力を保有するイングランド軍司令官・第6代サリー伯ジョン＝ドゥ＝ワレンヌ（John de Warenne, 6th Earl of Surrey, 1213-1304.9.29：ジョン＝ベイリヤルの義理の父）を、急遽派遣させた。

第6代サリー伯ジョン＝ドゥ＝ワレンヌは、ダンバー＝キャッスル近くを、包囲攻撃し、1296年4月27日、ダンバーの闘争（Battle of Dunbar）へととなった⁹⁸⁾。

イングランド軍・第6代サリー伯ジョン＝ドゥ＝ワレンヌ軍は、軍事的にあまり訓練されていなかったが、彼の騎兵隊の活躍により勝利した。

すなわち、ダンバー西部の高台に陣取っていたスコットランド軍・バーデンノホ領主ヨハネ3世カミン（John III Comyn, Lord of Badenogh, d. 1306.2.10）軍を、イングランド軍の騎兵隊と歩兵連隊が突撃し、東部の低い溪谷に移動させた時、彼の軍隊が2つに分かれ、軍事力低下をもたらした勝利したのである。

また、この勝利には、スコットランドの貴族、第6代アナンデル伯ロバート＝ドゥ＝ブルースと、その長男キャリック伯のロバート＝ザ＝ブルース（Robert the Bruce, 1274.7.11-1329.6.7：後のロバート1世Robert I：在位1306-1329）との支援もあった⁹⁹⁾。

イングランド軍が、このダンバーの闘争に勝利したのは、当然、歩兵連隊の活躍があったことは、言うまでもない。

勝利したエドワード1世は、スコットランド王国の多くのリーダーを、拘

98) ・ T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 197.

・ Ronald Nicholson, *Scotland*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 50.

・ Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. IV, *op. cit.*, p. 614.

99) Allen Andrews, *Kings & Queens of England & Scotland*, Reprinted of 1976, edition, Marshall Cavendish Books, 1994, p. 121.

束した。

それにより、エドワード1世は、ダンバー=キャッスルを手にし、エディンバラ (Edinburgh)、スターリング (Stirling) を統制下に置いた¹⁰⁰⁾。

エドワード1世は、1296年7月2日、キンカーデン=キャッスル (Kincardine Castle) で、スコットランド王ジョン=ベイリヤルを、ついに降伏させた。

ジョン=ベイリヤルは、1296年7月10日、反逆罪の罰として、王位を没収されることを認め、ブレッチン (Brechin) で、ダンバー司教に、強制的に廃位させられた¹⁰¹⁾。

スコットランド王に就けたイングランド王エドワード1世は、ロンドンに帰るとき、スコットランド王が歴代戴冠したスクーンの石を、1297年3月頃、持ち帰った。

スコットランドを去るとき、エドワード1世は、この地の統治を、イングランド軍司令官・第6代サリー伯ジョン=ドゥ=ワレンヌとヒュー=ドゥ=クレッシンガム (Hugh de Cressingham) とに任せた。

そして、エドワード1世は、そのスクーンの石を、自身が造らせたウェストミンスター=アベイ (Westminster Abbey) の戴冠式用の椅子の下にはめ込んだ。

そして、エドワード1世は、5カ月も経たないうちに、1297年8月22日、再度、スコットランドの商業港湾都市ベリウィック=アポン=トゥイード (Berwick upon Tweed) に行き、両王国の貴族や高位聖職者たちを、議会に招集させ、オマージュを執らせたのち、将来のスコットランド政府が、イングランド政府と合致するような組織づくりを命じた¹⁰²⁾。

この時、キャリック伯のロバート=ザ=ブルース親子も、エドワード1世にオマージュを執り、忠誠の誓約を、行った。だが、その後、忠誠の誓約は、破棄された。

100) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 197.

101) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.* p. 197.

102) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *ibid.* p. 197.

・ Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. IV, *op. cit.*, p. 615.

その後、1297年7月7日、アーヴァイン降状（Capitulation of Irvine）にて、ロバート＝ザ＝ブルースは、仕方なく自身の意思ではなく、エドワード1世に、オマーージュを執った¹⁰³⁾。

スコットランドを去る1297年8月28日、エドワード1世は、再度、ベリウィック＝アポン＝トゥイードで議会を開催させ、第6代サリー伯ジョン＝ドゥ＝ワレンヌを王の代理人・総督として、ヒュー＝ドゥ＝クレッシンガム（Hugh de Cressingham, d. 1297.9.11）を財務府長官として、ウィリアム＝ドゥ＝オルメスビイ（William de Ormesby, d.1317）を司法府長官として任命し、このスコットランドの地を任せた¹⁰⁴⁾。

この時点で、エドワード1世は、アイルランドを征服、ウェイルズを征服、スコットランドを統治できたとして、ウィリアム1世征服王以来、イングランド王の宿願であったグレート＝ブリテン島の統一ができたと感じていた。

廃位させられたジョン＝ベイリヤルと長男エドワード＝ベイリヤル（Edward Balliol, c. 1282-1364）は、フランスに行くまでの3年間、ロンドン塔に幽閉された。

ジョン＝ベイリヤルは、3年後の1299年に釈放され、フランスのイングランド領であるノルマンディーに行き、そこで余生を送り、1314年11月25日に亡くなった。

エドワード1世に対し、1297年8月22日、オマーージュを、強制的に執らされたスコットランドの貴族や高位聖職者たちの中には、不満や、憤りを持った者もいた。

その中の人物に、愛国心の強いウィリアム＝ウォレス（William Wallace, c. 1270-1305.8.23）がいた。

ウィリアム＝ウォレスは、1296年4月27日のダンバーの闘争の敗戦後、エドワード1世のイングランド軍が、スコットランドに駐留するのに反発し、イングランド兵とのもめ事により、1297年5月、ラナークの長官（the

103) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 206.

・ Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. IV, *op. cit.*, p. 685.

104) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 198.

sheriff of Lanark) サー＝ウィリアム＝ヘッセリング (Sir William Douglas) を殺害した¹⁰⁵⁾。

このことが切掛けとなり、1297年9月11日のスターリング＝ブリッジの戦い (Battle of Stirling Bridge) が起こった。

この戦いに対して、エドワード1世は、総督・第6代サリー伯ジョン＝ドゥ＝ワレンヌを向けた。

結果は、このスターリング＝ブリッジの戦いを軽視していた総督・第6代サリー伯ジョン＝ドゥ＝ワレンヌの敗北であった¹⁰⁶⁾。

これに危機感を感じたエドワード1世は、すぐに軍を建て直し、大軍を持って、1298年7月22日、フォルカークの戦い (Battle of Falkirk) に臨んだ¹⁰⁷⁾。

結果は、スコットランド軍のショート＝ボウ (short bow : 短弓) に対し、イングランド軍のロングボウ (Longbow : 長弓) の優越さにより、エドワード1世は勝利した¹⁰⁸⁾。

エドワード1世は、立て続けに起こった内乱を制し、漸く、イングランドの平穏なカーライル行くことができた。

エドワード1世は、完全にスコットランドを支配下に置くために、1304年、スコットランドの反乱軍の拠点であったスターリング城を、攻撃しだした。

エドワード1世は、イングランド軍の軍事力の圧倒さから、スターリング城から、ウィリアム＝ウォレスを追い出し、彼を殺害した。

スコットランドにおいて、平穏に時が過ぎていると思ったら、大規模な反乱がおこった。その首謀者が、キャリック伯のロバート＝ザ＝ブルースであった。

ロバート＝ザ＝ブルースは、1297年7月7日、アーヴァイン降状で、仕方

105) Chris Brown, *William Wallace: The Man and the Myth*, Reprinted of 2005, edition, The History Press, 2014, p. 79.

106) Maurice Powicke, *The Oxford History of England*, Vol. IV, *op. cit.*, p. 683.

107) T. F. Tout, *The Political History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 213.

108) Chris Brown, *William Wallace: The Man and the Myth*, *op. cit.*, p. 81.

・ Ronald Nicholson, *Scotland*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 57.

なく自身に対し、オマーージュを執った人物であった。

このことは、反逆罪に当たり、エドワード1世は、討伐にでた。

だが、エドワード1世は、赤痢（dysentery）¹⁰⁹⁾に掛かっており、意を貫徹する前に、1307年7月3日、亡くなってしまった。

VI おわりに

エドワード1世は、王室財政を逼迫させているフランスでの戦争を止め、財源収入拡大のため、ウェイルズを征服し、またスコットランドを征服しようとした。

また、その実現のためには、さらに莫大な戦費が必要であった。

特に、スコットランド侵攻のための戦費を調達するために、エドワード1世は、模範議会を開催させた。

市民の意見を聞くなどして、エドワード1世は、イングランド国内の統治は、経済、政治を安定させ、平穏に行っていた。

また、エドワード1世は、ウィリアム1世征服王以来、イングランド王の宿願であったグレート=ブリテン島の統一を、1296年4月27日、ダンバーの闘争の勝利で、スクーンの石を、ロンドンに持ち帰った時、貫徹できたと思った。

だが、スコットランドの支配・併合は、そんなに甘くはなかった。

エドワード1世は、自身の野望でもある“グレート=ブリテン（Great Britain）”の統一という道半ばにして倒れてしまった。

だが、イングランドにとって、エドワード1世は、領土を減少させることなく、財政を逼迫させることなく、着実に、イングランドの発展だけに、最大な勢力を使ったので、賢王と呼べるのである。

109) Allen Andrews, *Kings & Queens of England & Scotland*, op. cit., p. 52.